

特集 地域とともに歩み続ける

7面 クリスマスを彩る本

The Young Women's  
Christian Association

# YWCA

12

DECEMBER  
2020

No.759

〈第32総会期主題聖句〉

平和を実現する人々は幸いである  
—マタイによる福音書5章9節—

〈日本YWCAの使命(ミッション)〉

イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する  
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

〈日本YWCAのビジョン〉

地域で女性達が主体的に活動することを通して、  
以下の社会をめざします。

- (1) 平和憲法が生かされ、核も暴力もない社会
- (2) 女性と子どもの尊厳を守る社会
- (3) 若い女性がリーダーシップを発揮する社会
- (4) 多世代・多文化で多様な背景を持つ人びとを尊重する社会

[www.ywca.or.jp](http://www.ywca.or.jp)

Merry Christmas

地には  
平和が  
ありますように

Glory to God in the highest,  
and peace on earth

いま、困難と試練の中にいる一人ひとり、  
暗闇の中に光を求める一人ひとりに、  
クリスマスの希望が届きますように。

# 何が起こるか、何が正解かもわからない 私たちにできること

日本バプテスト連盟  
札幌バプテスト教会牧師  
石橋大輔

「地域とともに」を掲げた支援やサポート活動には、迷いがつきものだ。いつの間にか袋小路に立っていることもあるだろう。そんなとき、どう考えたら歩き続けることができるだろう。「地域に開かれ、地域と生きる教会」をめざして実践と模索を重ねる札幌バプテスト教会の牧師、石橋大輔さんのメッセージにヒントがありそうだ。

素敵な循環を生んだ  
「持ってきて・持っていく」系プロジェクト

「アベノマスク」が配られた時、不要な人から集めて必要な所に届けようという運動が各地で展開されました。それをまねて、教会の前に「マスクが不要な方は、持ってきてください」と書いたカゴを置いてみたところ、地域の方々から多くのマスクが届けられました。

北九州の南小倉教会が、誰かが机に置いていったものを他の誰かが持って

いく「どうぞのつくえ」という取り組みを始めました。それをまねて、教会前のカゴに「マスクが必要な方は、持っていくください」と書き加えると、置かれたマスクが減っていききました。こうして素敵な循環が生まれました。

そこで、教会員や教会幼稚園の保護者など有志の方々が持ってきてくださった手作りマスクも、教会の中に置いておくのを止めて、外に出し、誰でも自由に持っていけるようにしました。すると、多くの方が、歩道と教会との境界を越え、玄関近くまで入ってきて、手作りマスクを持っていくようになり

ました。マスクの横に置いた「チャリん箱」という募金箱に、お気持ちを入れてくださる方もいます。自分で使わずに、必要とする所に届ける方もいるようです。ここでもやさしさの循環が生まれました。

また、熊本豪雨災害の被災者支援のために寄せられた物資の中で、現地のニーズに合わずに送れなかった物を玄関先のテーブルに並べて、「必要なものがあればご自由にどうぞ。可能であれば、お気持ち入れてください」と呼びかけたところ、ここでも不思議な循環が生まれました。

正解はわからないけど……

この「持ってきて・持っていく」系プロジェクトを始めてしばらくすると、一人の人が一度に大量に持っていったしまうことが起こるようになりました。もちろん「ルール違反」ではなく、もしかしたら大量に必要とされているのかもしれない。でも、有志の方々が作ってくださったマスクについては、置いた数時間後に全部なくなっているのを見ると「大事にしてもらっているだろうか？」と不安になり、教会の外に出すことを躊躇してしまうこともあ

## 札幌バプテスト教会の地域とつながるプロジェクト



コロナ禍で集会やイベントが中止になった。案内することがなくなった掲示板に、地域の人々から集めた「感謝と祈りのメッセージ」を貼ったら「みんなの掲示板」ができた



「みんなの掲示板」を見ようと道行く人が立ち止まるようになったので、タープを設置してみた。感染対策をとりながらお茶やベンチを用意したら地域の人たちが立ち寄る「憩いの場」ができた



るのです。

こうした姿勢に「人の善意を疑うの  
ですか」とか「そもそも募金箱を置く  
時点で、無料」とは言えませぬ」と  
いったご批判の声もあり、「ごもつとも  
……」と頭を抱えてしまいます。正解  
がわからないまま、試行錯誤を繰り返  
しながら、プロジェクトを続けていま  
す。

### 絶妙に巡りゆく季節の中で

天が下のすべての事には季節があり、  
すべてのわざには時がある。

(伝道の書3章1節)

これは、口語訳の『旧約聖書』にあ  
る「伝道の書」の一節です。ここで「季  
節」と訳されている語は、ギリシヤ語  
で「クロノス」(英語clockの語源)とい  
い、定期的に流れゆく「時間」を指し  
ます。ギリシヤ語にはもう一つ「時」を  
表す「カイロス」という語があり、神  
や人が業を行う「時点」を指します。  
神が定められた大切な時点としての  
「カイロス」に対して、単調に流れゆく  
時間である「クロノス」は軽視されが  
ちですが、旧約聖書の人々はこの両者  
とも、神の与えられる大切な時として

理解していたようです。神の御旨にか  
ない絶妙に巡りゆく時の流れとして、  
「クロノス」が「季節」と表現されてい  
ることが、私にはとても美しい訳だと  
感じられるのです。

※旧約聖書はヘブライ語で書かれていますが、ギリシヤ  
語の対照語で説明しています。

### 限界を伴う行為でしかない

何をなすことが正解なのかは、私た  
ちにはわかりません。

前述のように私自身も正解がわから  
ず、何をすることで何が起るのかもわ  
からないまま、完全なる手さぐり状態  
で、課題にぶつかっては頭を抱えなが  
らプロジェクトを続けています。ただ、  
「止めてしまおう」とは思いません。い  
や、思わなくなりました。何かその時  
にできることに必死に取り組んでいる  
うちに、どこまでいっても、私にでき  
ることは、偽善でしかないし、限界  
を伴う行為でしかないことが、ようや  
くわかってきたからかもしれません。

### 神のなされることは皆 その時にならって美しい

先ほどの「伝道の書」は、こんな言  
葉で始まります。

伝道者は言う、空の空、空の空、い  
つさいは空である。

(伝道の書1章2節)

人間は、この先何が起るのかを知  
らないし、本当に正しいことが何かも  
わからないため、天の下で行うすべて  
の労苦はむなしと言います。まさに  
にその通りです。プロジェクトに寄せ  
られるご批判の声に、返す言葉は見つ  
かりません。

それでも、さんざん悩んだ末に何も  
しないよりも、何かその時にできるこ  
とに取り組みながら悩む方がずっとい  
い。そう信じて、プロジェクトを続け  
ています。どこかの時点で美しい答え  
を生むことはできないかもしれない  
……。それでも季節が巡りゆくように、  
その時その時に、自分たちにできるこ  
とを探しながら、続けていきたいと願  
っています。きつとそこに神のなされる  
美しい御業を、見させられていくこと  
になると信じているからです。

神のなされることは皆その時にかな  
って美しい

(伝道の書3章11節)



玄関先の「憩いの場」に地域の人々が訪れるようになったことが、「持ってきて・持っていった系」プロジェクトを実施する後押しとなった



「みんなの掲示板」をきっかけに、地域の飲食店のチラシ作りやお弁当配達を手伝うプロジェクトなどさまざまな活動が生まれた。石橋大輔さん(右)と中国料理店の店長





# 地域とともに 歩み続ける

YWCAは「地域とともに」を合言葉に、  
さまざまな活動を展開しています。  
地域のニーズをすくい、  
自分たちにできることを実践し続けることで、  
つながる、出会う、広がっていく。  
そんな活動の一例を紹介します。



カフェや講座やイベントなどたくさんの“入り口”を用意している



函館YWCA会館。改修の様子は地元新聞でも取り上げられた

閑静な住宅街に佇む函館YWCA会館は、大正後期のモダン住宅の趣を今に伝え、国の登録有形文化財に認定されている。この瀟洒な館内の一角に設けられたスリフトショップが地域の人々に好評だ。家庭で不要になった新品や中古品を引き取り、センスよく陳列し、手ごろな価格で販売。売上げの一部は地元の福祉施設などに寄付をする。訪れた人には来店のご挨拶と喜びを伝え、購入者には、その行為がもたらす意義を伝えていく。誰かの必要が誰かの必要を満たす——この循環を知って常連になる人も少なくない。

2019年、函館YWCAは70年近く使用してきた会館を大規模改修した。「地域により開かれた場」をめざして2年を費やした改修プロジェクトには、函館YWCA会員だけでなく地元の専門家や

識者も参画した。そもそも会館の歴史的な価値に気付かせ、文化財登録を勧めたのも「外の人」だった。改修の要を担ったのは、気鋭の若手建築家。YWCA運動を理解し、改修のビジョン設計から関わった彼は、のちに函館YWCAの会友になった。ほかにも多彩な人々の知恵と力を借り、提言に耳を傾けた。「それでは誰も来ませんよ」そんな苦言も受け止めたという。開かれたプロジェクトによって

会館には、スリフトショップ、居心地のいいカフェ、開放的なキッチンなど人が集う場が生まれた。地域に開くにはまず「心を開くこと」という。心を開き、人を受け入れ、ファンを増やしている。

函館 YWCA

## 心を開いたら 人の集まる場が生まれた



洋服や服飾品、雑貨がセレクトショップのように並ぶ



名古屋  
YWCA路上で生活する人々の  
「食」をサポート

毎週金曜日、名古屋YWCA「スープキッチン」のメンバーは、ボランティアと一緒にカレーや豚汁をこしらえて、まだ温かいうちに近所の公園まで運んでいく。事前に調整役の男性からその日に必要な数を伝えられるが、概ね30〜40人分。受け取りにくるのは年輩の男性が多いという。メンバーは、温かい容器を一人ひとりに声をかけて手渡す。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、配食を見合わせることも考えた。しかし「バナナ一本でもいいから続けてほしい」という利用者たちの要望を受けて、果物やゆで卵、個包装のパンを配り続けた。

名古屋市内には路上生活者をサポートする団体が複数あり、ゆるやかにつながりながら活動している。名古屋YWCAのもう一つの活動「炊き出し食器洗い」は、キリスト教系支援団体の炊き出しで使われた食器や箸を洗っている。月に1度だが、30年以上続く活



食事のほかに、マスクや日用品を提供することもある



ときに学生や留学生がボランティアとして参加する

動だ。現在は、感染対策として使い捨て容器に切り替えため食器洗いこそないが、調理器具や調理場の片付けを手伝っている。コロナ以前は150人分の皿や箸を洗っていた。昔はもつと多かつたが、それは路上生活者が減ったからではなく、支援団体が増えて利用者が分散したからだ、と見ている。複数の支援の手があれば自立するチャンスはある、という。実際に、路上生活から立ち上った人を見つけたが、そこには多くの人の支えがあった。これからも地域に広がる支援の輪の一役を担っていく。

※名古屋YWCAの休業期間のみ休止

大阪  
YWCA

## 中国帰国者と地域をつなぐ多彩なプログラム



大学が主催する子ども食堂と協働し、子どもたちとギョウザ作りを楽しんだ(2019年)

敗戦の混乱で中国に残された残留邦人が、ようやく日本に帰国できたとき、その多くは既に中高年となっていた。大阪YWCAは1977年、帰国者のための日本語教室を開講。以来、言語や習慣の違いから日本での生活が困難な帰国者やその家族をさまざまな形でサポートしてきた。2001年には、厚生労働省の委託を受けて「近畿中国帰国者支援・交流センター」を開所。近畿エリアに住む帰国者とその家族のセーフスペースとして、日本語学習や就労、交流など包括的な支援事業を行っている。帰国者の高齢化が顕著になった2008年以降は大阪市など10の自治体の委託で「地域生活支援」



中国帰国者への理解を深めるため、地域の人々を対象にシンポジウムを開催した(2018年)

それでも必要とあれば万全の感染対策をして、人に会いに足を運ぶ。

を開始。何らかの支援を必要としつつも孤立しがちな帰国者を地域につなぎ、安心して暮らしていくための多彩なプログラムを次々と展開している。最近では、大学に働きかけて、学生を対象に帰国者の講演会を設けた。また、農園の協力を得て実施した収穫体験プログラムでの出会いから、保育園での交流会が実現した。センターのスタッフは「つながる、関わる」を合言葉に、帰国者への理解と支援を求めて積極的に外に出て、小さな出会いの一つひとつを大切にしている。帰国者の課題を伝えて誠実に働きかければ、手を差し伸べてくれる人につながる。そこから出会いの輪が広がり、思いがけない支援のカタチが示されるのだ、という。現在コロナ禍にあつて制約はあるものの、





神戸 YWCA  
 その人らしく暮らす  
 ための居住を支援



居住支援の援助のあり方を学ぶ研修会では、地元大学の専門家を講師に招いた(2019年)



救援センターには、住む家を失った被災者が相談に訪れた(1995年)

1995年1月17日早朝、神戸YWCA会館を震度7の揺れが襲った。史上初とされた都市型大地震は、震源の淡路から阪神地区にかけて壊滅的な被害をもたらした。神戸YWCAは救援センターを立ち上げ、被災した地域住民の救援活動を始めた。被災者のほとんどは、地震や火災で住む家を失っていた。このときの支援の経験から「居住福祉」の必要性を痛感したという。居住とは、その人らしく暮らす基盤であり、適切な居住が確保されることは、基本的な人権なのだ。神戸YWCAはその後も復興から取り残された人々に寄り添った。見えにくいニーズをすくい、応えようと活動を続けるうちに行政や福祉、支援機関とつ

ながり、出会いが広がり、多様な地域活動や支援事業が生まれた。2020年、創立100周年を迎えた神戸YWCAは、再び居住支援の取り組みを始めた。安定した住居を確保したくてもできない人々は地域に多く存在する。立ち退きを迫られている、経済的に困難し家賃が払えない、高齢のため自宅の階段の昇降ができない、障がい理由に家を借りられない……。こうした相談者に対して、適切な住居を見つけるを手伝うが、問題が住居にとどまらない場合は他機関との連携が必要だという。現在、職員3名、神戸YWCA会員による相談員5名が担当する。まだ手探りの状態だが、震災から25年かけて培ったノウハウや人とのつながりが生きていよう。住み慣れた地域だからこそ在宅で暮らせる人は多い。ここでその人らしく暮らせるように支え続けていく。

広島 YWCA  
 地域に支えられた  
 こども食堂



こども100円、おとな400円。毎週木曜に開催



食事の後は勉強の時間。学習支援スタッフがサポートしている(2018年)

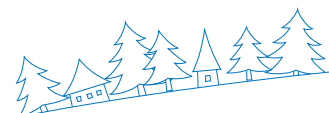
広島YWCAの「わいわい食堂」の料理は、手が込んでいると評判だ。旬の食材をていねいに下ごしらえし、手間をかけて調理しているのは、近隣から通うボランティア。子育てや親の介護が一段落した人や料理を作るのが得意な人、仕事を持つ人もいる。栄養バランスのとれた献立は、地元の薬局の管理栄養士が提供している。

食堂内においてい匂いが漂うころ、学校帰りの子どもたちがやって来る。小学生から中学生まで、みな一人親家庭の子どもたちだ。定員は14名。もともと大勢に開きたいが、キャパシティを考えると一杯という。今は感染を防ぐため、子どもたちを2班に分けて、イートインとテイクアウトの交代制をとっている。



テイクアウトのお弁当を用意。調理スタッフの感染症対策も万全

わいわい食堂は、地域の孤立しがちな親子の支援を目的に2017年、広島市の補助事業として始まった。開設にあたっては、児童福祉や支援の専門家と連携し、サポーターの育成にも取り組むなど、準備を重ねてきた。広報活動にも力を入れたことで周知され、多方面から支援の手が寄せられている。地域の商店から食材の差し入れもあれば、大手企業から自社製品の提供もある。地域と人に支えられて、3年目。当初はためらいがちだった子が、進んで話しかけるようになった。親子で利用できるため、親のリフレッシュにもなっているようだ。盛況ではあるが一方で、より支援が必要なものや親への多角的なアプローチが必要だという。そうした親子が安心して来られる食堂のあり方を模索している。





### 『サンタの友だち バージニア』

サンタはいるの?と  
新聞社へ投書した少女』

村上ゆみ子 著 東逸子 画  
偕成社/1,200円+税

「サンタクロスっているんでしょうか?」

1897年、8歳の少女バージニアはニューヨーク・サン新聞社に宛ててこんな質問を投げかけました。新聞社はこの問いに社説で答え、そのメッセージは、目には見えないものの確かな存在と大切さを伝え、多くの人々の心を温めました。返事を受け取ったバージニアはその後、何を大切にどんな人生を歩んだのでしょうか。巻末に社説の原文も掲載されています。今を生きる子どもたちと、かつては子どもだった心忙しい大人たちにおすすめの一冊です。

清田悦子



### 『ターシャ・テューダーの クリスマス』

ハリー・デイヴィス 著  
ジェイ・ポール 写真  
相原真理子 訳  
文藝春秋/3,000円+税

アドベントのリース作りから、雪深い森の中に再現されたキリスト降誕の場面、伝統的なオープンで焼いた七面鳥、森から運んだツリーはジンジャーブレッドのオーナメントで彩られ、その下には家族や友人への手作りの贈り物が並ぶ……。理想の庭と昔ながらの生活様式を求めてバーモント州に移り住んだ米国の絵本作家ターシャ・テューダーが、一から作り上げたコーギー・コテージでのクリスマスを、美しい写真とターシャのイラストで綴る。ターシャの人と動物と自然への優しさがあふれる本。

吉田亜希

b o o k

Merry Christmas

## いつもと違う クリスマスに おすすめの本

どのような年であっても、クリスマスは訪れます。今年も、それぞれの家で静かに過ごす時間が増えるかもしれません。

いつもと違うクリスマスに彩りを添えてくれる、おすすめの本をご紹介します。



### 『フランス人が こよなく愛する 3種の粉もの。』

上田淳子 著  
誠文堂新光社/1,500円+税

「3種」とはキッシュ、タルト、ケーキ・サレのこと。この本に出会うまで、キッシュなどの台生地を作るときにフードプロセッサーを使う工程が億劫で、冷凍パイシート頼みでした。このレシピは「バターに触らないように、手でバターに粉をまぶして……」といった風で、気軽に楽しく作れます。しかも、どれもおいしい! ディナーの一品になるケーキ・サレも手間なくできます。フランスでクリスマス期間の最後(1月6日)に食べるお菓子「ガレット・デ・ロワ」も掲載。お正月に挑戦するのも楽しそう!

西文子



### 『旅の絵本Ⅱ』

安野光雅 画  
福音館書店/1,400円+税

絵本作家の安野光雅が繊細な筆使いで描く、人気シリーズのイタリア編。文字はないが、ページいっぱいに広がる街並みや自然の風景を眺めながら、馬に乗った旅人と一緒に旅する気分が楽しめる。よく見ると、風景の中におなじみの名画や物語の一場面がさりげなく描かれるなど、遊び心も満載。ゆっくり時間をかけて絵の中に隠れているキャラクターを探し、出典を想像するも一興だ。イエスの降誕場面や三人の博士も描かれているので、クリスマスシーズンに部屋に飾ってみてはいかがだろう。

岡野亜紀子



エンパワーするNGO



## 2020年度クリスマス募金のお願い

日本YWCAは、日本全国・世界各地のYWCAとつながり、  
弱い立場に置かれがちな女性や子どもを支援し、その声を社会へ伝えるために活動しています。  
2020年のクリスマスを迎えるにあたり、  
以下の3つの活動へのご寄付を心よりお願い申し上げます。

### 東日本大震災被災者支援募金

東京電力福島第一原子力発電所の事故からまもなく10年になります。原発事故の終息には今後も長い年月が必要ですが、政府や各自治体による政策は次々に打ち切れ、放射能被災による課題はそれぞれの生活の上に取り残されています。日本YWCAは、あの日生まれた子どもたちが二十歳を迎えるまで支援を続ける決意のもと「com7300委員会」を立ち上げ、支援活動を行っています。これからも一人ひとりの「小さな声」に寄り添いながら、息の長い支援を続けていきます。皆さまのご協力をお願いいたします。

### ピースメーカーズ募金

日本YWCAは「平和を実現する人々は幸いである」をテーマに、一人ひとりがピースメーカー(Peacemaker)として平和を実現するための活動を展開しています。未来をみつめて、活動しようとする若い人たちのリーダーシップ養成に、ご協力をお願いいたします。

### オリーブの木キャンペーン募金(1口3000円)

日本YWCAは、イスラエル軍や入植者により脅かされるパレスチナの地に世界中の人々がオリーブを植樹する「オリーブの木キャンペーン」(パレスチナYWCAと東エルサレムYMCAの共同事業「JAI」が実施)を応援しています。パレスチナの人々にとって生活の糧であり平和と希望の象徴であるオリーブの木を贈りませんか。一口3000円で1本の苗木を植えることができ、パレスチナから証明書が届きます。

※通信欄にお名前をローマ字表記で必ずご記入ください。

お振込み先

郵便振替 00170-7-23723

加入者名 公益財団法人 日本YWCA

通信欄に「クリスマス募金(被災者支援)」「クリスマス基金(ピースメーカーズ)」「クリスマス募金(オリーブの木)」のいずれかをお書きください。

その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は「神は我々と共におられる」という意味である。(マタイによる福音書)

ご協力ありがとうございます

賛助費

布村耐子 石川和子 安武留美  
内山伸子 田崎桂子 吉田耀都  
野村春江 福田公子 大村直子  
藤井野百合 稲葉和寿子  
伊藤眞智子 石橋さなえ

ピースメーカーズ募金  
(平和をつくり出す女性のリーダーシップ養成)

伊藤眞智子  
酪農学園大学付属とわの森三愛高等  
学校生徒・教職員一同

災害時支援募金  
(オリーブの木キャンペーン募金)

小淵真理 坂和優  
伊藤眞智子 坪野えり子

(国内外の災害被災者支援)

板橋幸子 嘉屋陽子 藤井野百合  
堀内洋子 浅田和美 稲葉和寿子  
清水嶋洋子 伊藤眞智子  
日本基督教団久が原教会

(熊本豪雨災害被災者支援募金)

福澤幸雄 大野綾子 西田悦子  
東根順子 手島千景 的場孝子  
米山麻以子  
日本バプテテスト連盟札幌バプテテスト  
教会

日本キリスト教団別利教会  
日本キリスト教団島松伝道所  
日本キリスト教団旭川星光教会  
日本キリスト教団美唄教会  
日本基督教団野幌教会  
日本基督教団岩内教会  
日本基督教団旭川六条教会  
日本基督教団千里聖愛教会  
日本キリスト教団西札幌伝道所  
日本キリスト教団室蘭知利別教会  
札幌YWCA

一般財団法人 函館YWCA  
公益財団法人 名古屋YWCA  
公益財団法人 大阪YWCA  
一般財団法人 呉YWCA

東日本大震災被災者支援募金  
小野洋 塗美紗子 堀内洋子  
伊藤眞智子

(カーンサポーターズ募金)  
柏木妙子  
甲府YWCA  
カーンサポーターズ 62件

(2020年8月16日〜10月15日)  
敬称略

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室  
Tel. 03・3292・6121 Fax. 03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 実生律子/偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 [y-net@ywca.or.jp](mailto:y-net@ywca.or.jp) | にお名前を送ってください / フェイスブック [www.facebook.com/YWCAJapan](http://www.facebook.com/YWCAJapan)